原稿用紙３枚以内掌編小説

コミュニケーション２

Communication 2

父子シリーズ-1

Daddy, Son series -1.

うときゅういっき

by Khazu san

物書き

うときゅういっき

目次

●序 芭蕉に倣う

●本編 掌編小説 1「一方通行」

●本編 掌編小説 2「スカイ・ゼット（SKY-Z）」

●本編 掌編小説 3「これじゃぁね 」

●本編 掌編小説 4「ドラマ脳 」

●本編 掌編小説 5「臆するも」

●本編 掌編小説 6「広告が大っ嫌い」

●本編 掌編小説 7「なんか、違う」

●本編 掌編小説 8「進退」

●本編 掌編小説 9「これって」

●本編 掌編小説 10「そぅにも見えるし、こぅにも見える」

●本編 掌編小説 11「それぞれの秘め言（ごと）」

●本編 掌編小説 12「薄い中身も語呂次第」

●本編 掌編小説 13「そろそろ気付いても…」

●本編 掌編小説 14「明かすも何もフツーに真実」

●本編 掌編小説 15「木造大型客船「地球号」秘話」

●本編 掌編小説 16「おやちち」

●本編 掌編小説 17「どぅせやるなら畑違い」

●本編 掌編小説 18「走りながらのギアチェンジ」

●本編 掌編小説 19「本日、おやこ逆転の日」

●本編 掌編小説 20「借り猫、じゃらし」

●著者プロフィール

序

2022/8/30

芭蕉に倣う（第二ラウンドもこの序で）

かなり以前、
人にものを伝える表現形式としては、口承伝播性（口にし易さ）、読者想像範囲の広範度からして
「芭蕉の俳句が手本。このコンセプトを活かし、今少しガイド的な言葉添えをした新しい表現形式が出来ないものか？」
みたいな事を書きました。
なのに、一向にそれが出来ない。
例えば
直近記事「見当違いで逆効果」
の中で、
「人は思っている以上に遥かに優れた想像力がある。
高いアンテナとレーダーを備えている。
アンテナやレーダー感度がこちら側の想像以上に高い多くの方々からみれば「何も言わなくても見ればわかる（感じる）」ので、それだけで十分なのに、それ以上敢えて口にしたり

パフォーマンスしたりした時点で完全に「過多」「過剰」「嫌味」「これ見よがし」としてしか捉えられていない事に気付いていなかったのです。
記憶や印象に残してもらいたいがためにしている行為が、却って記憶や印象に残す事への「拒否反応」を起こさせてしまっている」
しかし是も
昔のある芸人さんのギャグフレーズ
「んもぅ、言わなくてもいいのに、言うんだもんなぁ」
を使えば他の文言は一斉不要だった。
伝えたい事を表すのに自分の場合原稿箋３枚を要していたのもたった２行で十分だった。
で、今回その反省も踏まえ訓練がてら掌編小説を原稿箋３枚以内で書き表すトライアルを始める事に致しました。

本編

2022/9/7-2

「一方通行」

「学生の頃、三国志時代を背景にしたある小説を読んだんだ。ある将軍が川の反乱を前にしてその平定を試みる話だった。武器に弓と槍を携えた軍勢を繰り出すものの、当然ながら何度軍勢を繰り出しても川の反乱は収まらず、虚しい戦いが延々と続くという様な筋書きだった。
読んだ当時は特に何も感じなかったが、最近何故かこの小説をよく思い出す」
「父さん、なんか近頃昔話が多いね。昔話をよくする様になると「そろそろお迎え」ってよく言うから気を付けた方がいいよ」
「でも俺みたいな爺の一匹や二匹居なくなった処で世界情勢になんの影響もないだろうから気にせんでもいいわ」
「えらく謙遜するね。生きている内から成仏身になってどうすぅんのよ。もう少し憎まれっ子で居ないと其れこそ即、成仏しちゃうよ」
「それよりその話の続きだが最近よく思うのは、そのストーリーから我々は襲い掛かってくる色んな災厄や問題に対して「武器になる」と言われて今手にしているものは本当に武器として役立っているんだろうか？とか「戦い方そのものも是でいいんだろうか」とかいう事を思い始めたんだ。ひょっとしたら飛んでもない勘違いをして頓死の山を積み上げてきただけなんじゃないかなって。それこそ初歩的な戦略ミスを鼻から犯していた。そして今迄積み上げてきたと思っていたものが全て無駄だったんじゃないかなって、人生も終わりに近

づいてきた今、特にそう思うんだ」
「父さん、そんな事ばかりが話題だから、母さん三行半残してドロンッパしちゃったんだよ」
「そう言えば今ふと思い出したが」
「全然聞いてない」
「子供の頃「コンバット」っていう連続戦争テレビ映画があったんだ。よく観ていたんだが、その中の一話で「あの丘を取れ」みたいな話があって、自分の隣でさっき迄笑っていた戦友も含め何人もの犠牲を出した後に、やっとの思いで戦略的に重要なその丘を確保したんだが、その直後に本部からの無線で転戦命令が下る話だった。
その時、部下を死なせた下士官が「何の為の犠牲だったんだ」と命令を伝えた現場の上官に食って掛かろうとし、逆に下士官の生き残った部下が抑えた。この話は川の反乱の平定を命じた三国志時代の将軍と兵の話とはちょっと意味合いが違うが、何故かこの二つの話を、最近よく思い出すんだ」
「相変わらず父さん、人の話、全然聞いてないよね。それって大声の独語癖みたいにしか聞こえないよ。止めた方がいいと思うよ。みんな気持ち悪がるから」
「独語癖ねぇ。でも、其れこそみんな、一方通行の独語癖同士みたいなもんなんじゃないの？お互い仲良く話を交わしている様で、その実全然聞いてない。一方的に喋りまくって、相手の話は何も耳に届いていない。言わば、話が全く噛み合ってない相互独語癖社会。有口無耳みたいな」
「父さん、夕飯、何食いたい？俺、作るよ」
「カワシばかりが上手くなる」
「旨いかって？モチ、俺のカレーは旨いよ」

本編

2022/9/9

「スカイ・ゼット（SKY-Z)」

「ねぇ、オヤジ。最近わざとカッコ悪くしてない？」
「おっ、スルドイご指摘。分った？というより素の儘で居る事にしたんだ。元がカッコ悪いから素の儘だとオートマでカッコ悪くなったというだけの話」
「えっ？オヤジ「そろそろこの世にオイトマ（おいとま）します時期」を迎えて悟った訳？」
「神仏から一番遠い俺が悟りなんぞ開く訳なかろう。ちと、種を明かすから時間が許すなら耳を貸せ」
「体が耳にくっ付いているから、体ごと此処に置いておくよ。どうぞ」
「最近みんな如何にカッコいいかを我勝ちに競合っているだろ。だがその様に皆同じ方向に向かって競合っていると、相手に抜きん出た処でその差分は多寡が知れている。処がカッコいい、の正反対をやったら労する事なくそれだけで人目を引く。カッコよさ競争の最終目的が人の注目を集める事だとすれば、反対の振る舞いをするだけで無競争に注目を浴びられる。例えばフィールドトラックの 400 メートル走で一人だけトラックを逆走する光景を思い浮かべれば直ぐに分るだろ？」
「何の話？」
「マーケティングの極意の話だ。Not 同質競争の差別化 But, field change の差異化の話」
「えっ？真面目な話だったの？」

家のオヤジは「真面目な話をしている」と思って真剣に聞いていると最後は「なぁ〜だ、阿保臭」話になるし、今みたいに「又言ってらぁ」話と多寡を括って聞いていると実は真面目な話だったりするから困るのです。バカなんだか利口なんだか、大人なんだかガキンチョなんだかイマイチ分類不能な「妙チキリンオヤジ」なのです。
「商売もどっちが儲かっているかを嵩上げ迄もして競合っているが、反対に自ら先んじて「身銭を切って見せる、敢えての損」に出れば是又労せずして企業の社会的価値が上がる。今度は経営戦略の話だ。分る？分った？分ったかって訊いてんの」
「分った様な、分らん様な。でもトラック逆走とか大損こいてんのに左団扇してたら「ありゃまともじゃない」って思われるだけなんじゃないの？フツー」
「馬鹿と天才紙一重ってか？
俺は別に天才ではないが馬鹿でもない。極めてフツーの爺だ。しかし是を「フツー」だと思えない世間の方が余程フツーじゃない様な気もする。特にコロナ禍以降感染力に倍するスピードと拡散力で金太郎飴、横並び一線無言の圧力、ちょっと違えば村八分、の同調圧力病がそれに勝って大蔓延だしな」
「ところで何でそんな話してんの？オヤジって何屋さん？職業というか社会的地位というか」
「年金爺さん」
猛暑も終りそろそろ秋。近頃幾分涼しくなり始めた事もあって毎夜男やもめ同士、こんな感じで夕食後を過ごしております。
傍からは、今時、爺さん相手に多くの時間を費やしている自分も「親も変だし子も物好き」と一括りに見られている様です。
そんな訳で
「坂の上の KY ズレズレ父子（おやこ）」
略して「SKY-Z」
是が最近、ご近所から家の門に被せられた見えない本表札の様です。

本編

2022/9/10

「これじゃぁね」

「こんな投稿記事ばっかり載っているんじゃァ、若い奴は見なくなるわなぁ」
「何の話？」
「30 代以降主体の SNS の投稿記事。個人の投稿、法人の広告問わず、殆ど全部「自分はこんなにリア充」のオンパレードじゃないのよ。是じゃぁいくら何でもうんざりするわなぁ。爺が見てもウンザリする位だから」
「オヤジだって前はコテコテの「ワテこんなにリア充で、おまぁ」記事書いとったでなぃのよ」
「人は誰でも過ちを犯す。暗い過去もある。「笑って誤魔化せ、自分の失敗。飽く迄罵れ、他人の失敗」という格言もある」
「オヤジは自己正当化理論の持ち駒数から言えば我が国でも有数やね」
「第一、本当にリア充だったらわざわざ人になんか報告せんだろぅに。せんでも十分満たされている訳だから、それを宣伝する必要も感じんだろうし、むしろそんなこと宣伝したら是見よがしこの上ない事になってしまうという気働きの方が先に来るのが普通だわなぁ」
「聞こえないふりして、もう持論、進めて、俺の話カワシてるよ。かなりシタタカだよね、オヤジは」
「結局、リア充の宣伝てぇ言うのは、自分がリア充じゃない事の裏返し証明なのよ。それを見抜かれまいとして過剰演出に走る訳よ。
多少的が外れているかもしれないが、最近チラ見した例で言えば、料理の投稿で「ちょっと

冷蔵庫に余り物があったので、チャチャっと作っちゃいました」なんていうのも「さり気なさ」を装う演出に過ぎなくて、実際には「冷蔵庫の余り物としては信じられない様な食材を使っているし、チャチャっと作った割には年に一度しか使わない様なお皿の上に、見るからに手の込んだ料理を、画角黄金比率に則った配置に従った盛り付け」で「決めまくって」いるから、更にウンザリしちゃうんだよな。決めまくってる癖にさり気なさ演出、それと「どぅ、私のリア充ってスゴイでしょ、羨ましいでしょ」の裏自慢、見え見え。
あざとさ丸出し。
リアルの欠片もない。何より人目の、演技、演出、自己ヤラセ」
「オヤジ、なんか、女の人に個人的恨み、持ってない？実生活で？
最近チラ見したという割には、何度も考えを整理して推敲し、話し方の抑揚迄リハーサルとイメトレを繰り返した上で喋っている様な気がする。
相当長い時間かけて練習してきたんじゃない？実体験を基に、復讐がてら」
「お前、俺の悪い処、受け継いじゃったなぁ、妙な「カコツケ分析癖」を」
「一応、自覚はあるんだ、オヤジも自分のしている事に」
「そういう人の神経逆撫でする処も、一言多い処もコピーしちゃったの？」
「トンビが鷹の場合でも、鷹がトンビの場合でも、どの道、蛙の子は蛙、なのよ。多分」
「お前、職場でゲジゲジ扱いやろぅ」
「御近所でのオヤジ程じゃないよ。多分」
「人は自分を映す鏡かぁ」
「これじゃぁね」
「これじゃぁね、って何が？」
「これじゃぁ、母さん、逃げる訳だわ」
「ならば返しで、これじゃぁ、お前も嫁さん、来ん訳だわ」

本編

2022/9/11

「ドラマ脳」

「ドラマじゃぁ、すったもんだの挙句、最後の最後になって留飲を下げる事が多いが、現実世界では最後の最後になってもちっとも溜飲が下がらない事が殆どだ」
「オヤジ、哲学ばかりしてないで少しはコロナ禍以降危機に瀕している商売の方に力入れた方がいいってみんな言っているよ。俺もそう思うけど」
「実は俺はもう金にまつわるうじゃうじゃも人気取りごっこにも飽き飽きしているんだ。従業員は食わさにゃいかんが、それ以上は別にどうでもいい様な気がしてならんのよ、最近」
「どうしてそう直ぐ達観しちゃうのよ。もう少し泥臭くなったら？アンマリ達観し過ると天からのお召が早まっちゃうよ」
「一度くらいは原宿駅横づけじゃなくてご当地の駅横づけのお召列車もいいかも知れんで」
「マタマタ訳の分からんオヤジギャグなんぞぶっ飛ばして」
「ところがだ、」
「あれ、俺のイヤミは完全スルー？」
「まぁ、聞けやぁ」
「やっぱりスルーだ」
「Once more again 処が、だ。「ドラマの方を正」とするドラマ脳から見ると、世の中で実

際に起こっている全てが「そんな筈ないだろう」や「あんまりじゃないの？その仕打ち」に見えてくる訳だ。「約束されていた筈の結末」と疑いもしなかったものが、いつまでたっても起らず、いつの間にかそれは「約束されていた筈？筈って事は、それが事実ではなく仮定だって事を、ある程度そちらが認識していたって事だよね？」と突如、手の平を返した様な逆突っ込みを受け、その後は「そんな事、約束した覚えはない」と突き放され、最後の最後には「そんな甘い話、この世にある訳ないだろう」と言うような目に遭う事が殆どの世の中だろ？」
「ドラマ脳って初めて聞いたけど、何となく分る様な気もするわ」
「女の人にはお花畑脳とか白馬の王子様脳とか言った方が、リアリティがあるかもしれんな」
「商売に身を入れないでネットばかり見ているんでしょう」
「エロ動画の次位にしか見てないよ」
「エロ動画ばかり見ているんだったら、増々商売に力はいらないでしょう。従業員に申し訳ないとか、思わないの？」
「それはそれ、是は是」
「線引きの仕方がよう分らん」
「と言う訳で、」
「又、スルーかよ」
「ドラマ脳を何とかしない限り、いつまでたっても不満たらたら、不平ブースカ。スネる、フクレる、ゴネまくるにしかならない様な気がする、けどね」
「オヤジ、どっかの回し者？」
「観察結果の報告者」
「でも言われてみれば今の殆ど全てのビジネスが、オヤジの言う「ドラマ脳」を当て込んでそれを囃し立てる事で成り立っている様な気もする」
「ドラマ脳を「潜在需要」ドラマ脳の囃し立てを「需要喚起策又は広告」と言い換えるともっと分り易い」
「今度は、口車に乗って金品巻き上げられた実体験、どっかであったでしょ。先日はおなご話だったけど」
「何にでも見境なく食いつく「ダボハゼ going な総領の甚六」
通称「ダボ六」が俺
又かよ、ダボ六、今度は何の巻？だって」

2022/9/11
毎日、あぁでもない、こぅでもないと暇に飽かせてあれこれ考えていると、片隅に追いやられていたものが、ある日突然、真ん中に躍り出てくる現象が誰にでもありますが、本日、朝に突然「ドラマ脳」と言う言葉が躍り出てきましたので、書いてみました。
これも前作同様、父子（おやこ）会話シリーズ（？）モノです。

本編

2022/9/13

「臆するも」

「悩んで困って訊いているのに、一般論謂われても、ねぇ。何も言われなかったのと同じでしょ。同じどころか、その人には悪いけど、その人が一般論謂い終わる迄待っているのさえイヤになってくる。訊くんじゃなかったって思っちゃう」
「でもそれって、フツーじゃない？突然パッと訊かれて大当りぃな具体的アドバイス言える人って皆無じゃないの？
んっ？オヤジ、又あれ言うんでしょ「知識 X 経験＝智慧」理論。
あれを此処で言い換えると、的確なアドバイス（知恵）は得た知識を多岐に渡る経験で磨く事によってのみ得られる。玉、磨かざれば光なし」
「お前最近、話が早くて助かるわ」
「日々是成長」
「じゃぁ何故、折角知識量があるのに「玉光」の元になる経験数が少ないのか分る？何故こんな宝の持ち腐れ状態が起きているか？宝の持ち腐れどころか知識が出口や手足を失って「欲求不満で不完全燃焼な在庫だぶつき状態」になっているか？」
「一度でも失敗したら Life game is over!!になりそうで怖くて手が出せないって感じかな？

俺は」
「成程」
「後は、失敗しない様、事前に完璧状態目指すけど、完璧なんてあり得ないから何時迄たっても始まらんとか」
「他は？」
「人目、かな。人前では死んでも恥だけは掻きたくないって、先ずそれがあるかな。俺」
「約すと人前で恥を掻きたくないから完璧を期そうとする余り怖くて手が出ない。その流れが経験不足の元っていう事？」
「まぁ、大体そんな処、かな」
「人目、完璧、恐怖って三つ言うと喋るのにちょっと長ったらしいから、ひと纏めにして最後の結果の「恐怖」だけ取って、「臆病」と言い換えてもいい？」
「もの凄く臆病になっているから、っていう事？確かにその方が実感、あるかも。
じゃぁ、何でそう迄臆病になっているのか？って、又？」
「お前、大分コツ飲み込んできたな。だけど、それは訊かないよ。だってもう人目と過度な完璧主義がその元にありそうだって、既にお前が自分で答えているじゃないのよ」
「それが正解だとして訊く必要なしなら、次に何訊くの？何を喋り出す訳？」
「臆病っていう漢字の話」
「おっ、意外な展開。やや興味」
「臆病って言い換えると「病的に臆する」
つまり過剰に後ずさりする、羹に懲りて膾を吹くイメージ。
次に「臆」っていう字は「肉月（にくづき)」に「意」という字だろ？「意」は「心の上に日が立っている状態」つまり「何かを目指して向かっている」感じかな？
その「意」に「にくづき」という自己防衛本能的「生身の部分」がくっつくと「意」が「警戒と逃避を始める」のが「臆病」
自分は「意」に対して「生身の部分があるから」と言い訳する。
逆に人が少しでも臆すれば背後目線で「臆病者」と罵る。
そして人は皆、この背後目線を一番怖れる。
是が臆病（警戒と逃避）の発生元」
「日本語ムズイけど意味深でオモ（シロ）深い」
「ならば息子よ、臆する事なく生き給え」
相変わらずの自営業オヤジ訓でした。

2022/9/13
これも前作同様、父子（おやこ）会話シリーズ（？）モノです。
自分は現在、実際には一人暮らしですが、こう書く事で離れている息子たち（とその家族を含めて）とコミュニケーションを取っている「心算（つもり）」になっているのかもしれません。
内心では。

本編

2022/9/13-2

「広告が大っ嫌い」

「わしゃ、広告が大っ嫌いじゃ」
「どうしたの、突然、切れまくって。又おなごに振られた八つ当たり？」
「違う!!例えばだ、お前の横に来た初対面の奴がいきなり「俺が一番だ」「一番カッコいい」「一番頭いい」「一番女にモテ男だ」って言いだしたらどう思う？「なんだ、こいつ？って思うだろ？」
「まさかそんな奴、いる訳ないじゃん」
「いるよ。広告って将に「自分が一番」って言いまくる事じゃないの？」
「うっ」
「広告だけじゃなくて、例えば入試にせよ入社面接にしろ「自分が一番」の争いだろうが。カッコよく自己アピールなんて言っているが。違うか？」
「それは仕方ないんじゃないの？世の中競争なんだし」
「古来我が国では「自分が一番」等と言うのは「慎みの無い事」とされてきた。それを臆面もなく「是見よがし」にでも言おうものなら「外道」と目されてきた。俺のオヤジやお袋の世代は大抵そうだった。
恐らく今の我々世代の根底にもそうした心象があると思う、現実世界に於いては。
処が広告なり入試なり就活となると全く別物扱いだ。別物扱いしている事にすら気づいていない。何故だ？」
「俺からすれば、それを同一視する方に余程無理があると思うけど」

「ちょっと遠回しなガイドをするが、多分それは判断するのに「自分の目の前にいる本人（あるモノ)」に対して抱く自分の心象に自信が持てないからだ。
その代わりに目の前にいる本人（モノ）のパーツである「属性（出自)」
例えばなんとか大卒だとか何とか社社員だとか、●●製だとかいう「属性（出自)」
もっと分り易く言えば「肩書 (Brand)」に頼っているからだよ。判断するのに「肩書(Brand)にしか頼れない」「頼らざるを得ない」からだ。
そうなる原因は目の前にいる相手の素性（素顔）を見抜く力がないからだ。自分が得た心象に自信が持てないから no pass で「皆が認める」「皆が納得する」肩書(Brand)で代用しているだけじゃないの？」
「あっていそうで、あっていない様な。妙な気分。でも、そう言っているオヤジだって店の広告してんじゃないよ。だとしたらちょっとインチキ臭くない？Just 矛盾 itself じゃないの、それって」
「広告には宣伝と広報がある。うちがやっているのは広報だけだ。お知らせ、認知活動だけだ」
「其れってどう線引きするの？自分がやれば広報。他人がやれば宣伝、とかじゃないの？」
「うっ、かなりスルドぅなってきたな、知らん間に」
「俺の世代、是がアベレージだよ。今迄ずっと騙されてきたから、おいそれとは鵜呑みにしないのよ」
「その点はお前達の方にポイントがあるな」
「余り人前で言わない方がいいと思うよ、今の話」
「しかし肚に貯めてあの世にいって、あちらで爆発させたんじゃ向こうの住人に迷惑が掛かる。だからこの世にいる間に小まめにガス抜きしておかんと」
「まるであの世に行った事があるみたいだね」
「5,6 回近く迄行った事があるから大体の様子は分るのよ」
「しぶとかぁ」

2022/9/13-2
これも父子（おやこ）会話シリーズ（？）モノです。
実際には一人暮らしですが、是を書いている間はそれを忘れられるので、暫く書く事になるかもしれません。

本編

2022/9/14-2

「なんか、違う」

「温暖化対策の紙面トップがCO2排出レジ袋の有償化だとか、生態系環境の話を環境景観の話にダウングレードするとか、そんなチマチマした小細工じゃ追いつかんのよ、悪化速度に」
「今度は何？何、吠えてるの？」
「温暖化対策って言うなら価値観や生活を自ら変えて、排出量の大きいエアコンの温度制限とか自家用車の不要不急使用制限とか総力戦をせんと。旗振り役も我々も外向けのやってます感だけで本気が感じられんのよ」
「この夏エアコン壊れて扇風機だけで過ごしたし、コロナワクチン打つとアナフィラショックになるからってワクチン打たず、人混み避けて歩きと自転車で頑張れちゃったものだから強気なんでしょ？」
「体験検証しただけだ」
「直ぐ理屈捏ねるよね。だから母さん、ドロンパな訳よ。俺は元々エアコン嫌いだからいいけど母さん居たら冗談じゃないって。そう言えば運転免許がない事も、大学時代何やってたのよ、あの人、ってムリまくってたし」
「免許はうつ病で休職している時、あいつが車ぐらいないとご近所に恥ずかしいから取りなさいよ、いい機会だからって無理やり教習所に行かされたが、うつ病だったから適正で

はねられ教習所の方から逆に、来なくていいって言われたのがトラウマになって、それ以来だ」
「いいよ、それ位で。暗い過去の物語は。いつもうつ病時代の話でるよね、オヤジ。もうみんな聞き飽きたから其れも止めた方がいいと思うよ。老婆心ながら」
「うつ病経験全体がトラウマだから普通の人は蓋をするんだけど、何故か俺の場合、その逆反作用でついつい出ちゃうのよね。御免なさいね、息子様」
「いい歳こいて、スネないで」
「ハイ、ムスコ様。処でお前、部分最適、全体最適って知っているか？」
「知らないよ、そんな中国語（四文字漢字熟語)。又、妙な処で教わってきたんじゃないの？駅前の中華飯店の姑娘（くーにゃん）の布団の中で、とか？」
「アホンダラ、お前どっちが親でどっちが子やねぇん？」
「みんな俺の方が大人だって言っているよ」
「うっせぇ、人の話の腰を折るな。続けるぞ」
「どうせ積年の我儘、急には直らんだろうから、どうぞ」
「じゃぁ始める。例えばEV車の電池だ。CO２排出量が激減するという謳い文句だが、是は車単体で見た場合の話だ。ところが仮定の話になるが、仮にその車のCO２排出量ほぼゼロの為のリチウム電池だとか燃料電池、水素電池を作るのに工場で多くのCO2を排出していたとしたら、社会全体で見れば結局±ゼロかむしろ＋αになっている可能性もある訳だ。この車単体で見るのが部分最適、社会全体で見るのが全体最適だ。
当然全体最適で見なきゃならんわな。今のメディアでの話は車業界と言う部分最適の話ばかりしているでしょ。だから「なんか、違う」なぁって。もっと大きく社会全体で見る視点が必要な気がしてならんのよね」
「オヤジも自分の生活、そういう視点で改善した方がいいと思うよ、マジで」

2022/9/14
これも父子（おやこ）会話シリーズ（？）モノです。
確定ではありませんが、次回辺りで父子（おやこ）シリーズは一旦打ち止めにしようかとおもっております。

本編

2022/9/15

「進　退」

「あぁ、やだ、やだ、もう振り回されるのは御免だ。女でも会社でもお金でも兎に角何かに振り回されるのは金輪際御免だ」
「あらららぁ、又切れてる。一日一回ブチ切れるのが日課みたいね」
「何、言ぅとる。現象としては毎日同じ様にブチ切れているかに見えて、その内容は毎日違っておる」
「よくその歳で本腰入れてブチ切れられるよね？少し異常なんじゃない？染色体か何かが」
「お前、染色体なんぞを持ちだしたらお前にも類が及ぶんだぞ。分っとるんかぁ？あん？」
「大丈夫。オヤジの遺伝子は異常過ぎて恐らくコピー出来ないから、多分俺は大丈夫」
「俺は今日、遺伝子について語る心算はないぞ。今日のお題は「殺生与奪の権」についてだ。振り回される元となる概念だ」

「オヤジ、ほんと漢字多いよね。だから話が固くなるのよ。何でそんなに漢字が出てくる訳？」
「子供の頃、家で会話と言えば漢語だった。オヤジは学科の中で漢文が一番好きだと言っていた。俺は興味ないし口にもせなんだが、オヤジとその影響を受けた弟が俺の頭越しに訳の分からん空中戦を毎日やっていた。多分それが今になって個体内遅延隔世遺伝したのかも」
「よくもまぁ、そう意味不明の漢字熟語がポンポン出てくるよね。役に立ちそうもないけど特技は特技だね」
「もういい、茶化しは。そろそろ本題に入らせてくれ。老い先短いんだから」
「一晩ぐらい関係ないと思うけど、まぁどうぞ」
「俺のオヤジが言っていた意味不明の漢語の中で一つだけ覚えているのがあるんだ。それは
「生かすも殺すも胸先三寸の「殺生与奪の権」が自分以外にあるからこちらが振り回される。常に自分にあれば振り回される事はない」って。
奥さんやら上司やら、システムで言えば入試とか就活、会社やら出世やら、に。
「こんな事言ったらどう思われるか？」と言う心配も与奪の権が自分以外の相手にある事になる。俺が敢えて言いたい放題言うのは相手の顔色伺い等しないぞ「殺生与奪の権は渡さぬぞ」宣言みたいなものかもしれない。
但し、とオヤジは「その権は自分に対して使うもので、人様に対して使うものではない」ってな」
「それを相手に対して使うな、は分かったけど、自分に対して使うってどういう意味？今一つ「？」なんだけど」
「多分こうだ。勤め人だとリストラをいつ、誰にするかの殺生与奪の権が相手の上司にあるから受ける側は決まる迄落ち着かずイライラする。気持ちが振り回される。
だが自営業なら進退は自分次第だ。その決断による結果の良し悪しに関わらず全ては己が胸先三寸。責任を取るのと引き換えに決済の権を得る。確かに怖いが少なくも不意の宣告に怯えながら待つイライラはなくなる」
「じゃぁ夫婦の場合は？」
「同じだ。夫婦が対等じゃなくなって与奪の権がどちらか一方に偏って久しくなったら、それが分れ時だ」
「という事は、実相は not 母さんドロンパ but オヤジから別れた？」
「Yes、こちらから退いたんだ」

シリーズ内シリーズ、これで一旦　おしまい

2022/9/15
これで一旦父子（おやこ）会話シリーズ（？）モノはおしまいです。
原稿用紙３枚以内掌編小説シリーズで次に何を書くかは、今回も未だ決まっておりません。
ところで、数日前面白い記事を読みました。
「寝ている間にせき髄液が脳内を掃除し、翌朝にはリフレッシュしている」のだそうです。
一晩寝て起きると前夜の原稿を全部書き換えたりすることが結構頻繁にありましたが、其れも関係しているのかもしれないなぁと少し驚きました。
と言う訳で、一晩明けてから次回以降の事を考えてみようかと思っております。

本編

2022/9/16-2

「これって」

「結婚前、女性は
「男なんてちょっと冷たくすれば、すぐしっぽ振ってくるわよ」
結婚してしばらくしたら
「結婚なんて妥協の産物よ」
結婚して何十年か経ったら
「亭主元気で留守がいい」
そして最後は旦那さんも奥さんも
「結婚は人生の墓場」
これって全世界的に共通した心象とばかり思っていたが、外国人の女性と話してみる機会が増えると、そうとも限らん様だ」
「何よ、突然藪から棒に」
「今言った中で言い方を変えれば外国の女性からも、偶には口にするのを聞いた事があるが、それは最初の「男なんて云々」だけだった」
「オヤジ、いつからそんな妙な統計、採ってんのよ？一体、毎日、何を考えて暮らしている訳？」
「まぁ聴け。未だ統計結果の観察分析篇があるから」

「ゲッ」
「よく不慮の事故や病気なんかで旦那を亡くした時の奥さんを形容する枕詞に「気丈にも悲しみに耐え」とか「涙をこらえて慎ましやかに」とかあるだろう？
処が外国の事故や戦争のニュースなんかを見ると夫を亡くした奥さんは取り乱したまま大声をあげて泣いている訳よ。
あの姿を見ると、我が国の奥さん方って旦那さんが亡くなっても本当に悲しい思いをしているんだろうか？実は「悲しみの現物」なんかまるでなくてダミーもいいとこ。
むしろ「やれやれ」とか「しめしめ」と思っている方が圧倒的に多いんじゃないのかなって。
と言うのも、奥さんが恥ずかしいものを連れて歩くのを嫌がって「自分とは関係ありません」を示すかの様に、わざと距離を置いて先を歩き、並んで歩くのを拒否された旦那さんは暗い顔をして三歩後からうつむき加減に歩いている。四方八方是だ。まるで葬列か市中引き回しの列だわ、この光景」
「何かオヤジ、母さんと離婚してから我が国の女性に対して偏見が更に偏ってない？」
「更に続くよ、偏見は。基っ、観察は。そう思ったのも「お父さんの下着は別洗濯」とか「死んだら実家の墓に入ります」とかよく言われて。
是はそれ元の類推だが、最近ニュースで単身赴任の旦那が週末帰宅から赴任地へ帰る晩に奥さんと子供のいる自宅に放火したとかの事件を耳にして「ひょっとしてこの旦那、週末帰宅時に「お帰りなさい」も言われず、赴任先へ帰る時には「気を付けて」も無しの完無視。挙句の果てに奥さんと子供が裏で「どぅせなら行った儘で居てくれた方がいいのにね」と笑い合っているのを聞いてしまい瞬間湯沸し器と化しての凶行だったんじゃ？とかね」
「微に入り細に渡っての分析、こわっ」
「まだある。その予備軍の話だ。高校生のカップルがそれ迄は仲良く手を繋いで歩いていたが駅の自動改札を抜ける時、彼氏の後に続いて入ろうとして足を止め、少し躊躇った後に彼女の方だけ別のゲートに移って通過した。その後又二人は何事もなかった様に手を繋いで歩いて行った。無論彼氏は気付いていない。既に萌芽はこの頃からだ」
「女もなんだけど…
オヤジの方がもっと…
なんだわ、なぁ」

2022/9/16
「これで一旦父子（おやこ）会話シリーズ（？）モノはおしまいです」
と前回「進退」の付記で書きました処、読者の方から
「イライラする処が多いシリーズだが、終わっちゃうとなるとちょっと寂しいような気もするからもう少しブツクサを続けて欲しい」
と言った様な趣旨のご意見をちらほら賜りましたので、もう少し書く事に致しました。
前言撤回は朝飯前。この風見鶏体質こそ私の真骨頂で御座います。
読者様の「書いて」のお言葉には直ぐにデレデレと傾き、
「もう書くな」のお言葉には「知ったことか。俺の趣味だ」
と開き直る。
将に身勝手な「ご都合主義」の権化。
これぞ私奴（め）の「身内権現 itself」（自分の心理のもっとも基底部に存するもの）でございます故。

本編

2022/9/17-2

「そぅにも見えるし、こぅにも見える」

「店のネパール人コックがオヤジの事 very dangerous って言ってた。危な、って」
「気にせんでいぃ。連中の言う dangerous はヤバイ奴と言う意味じゃなくて「おっかない」位の意味だから。何せ英語のボキャが全部で 100 もない連中だからな」
「危ないもおっかないも両方ダメなんじゃないの？客商売にしても市民生活にしても。我が国のスタンダードは「安心安全で優しい好々爺（じぃじ)」でしょうに」
「じぃじにばぁば？アホか。そんな気持ちの悪いものに誰がなるかぃ」
「なるかぃって、ゴネたって仕様がないでしょうに。スタンダードはスタンダードなんだから勝てっこないでしょう。いい歳こいた大人が、その位の事、分かんなさいよ、息子に言われる前に」
「そう言うお前って、何？
公序良俗を守る会とか時候の挨拶だけに止める付合い推進会議の代表？
それとも、見て見ぬ振り実行委員会とか触らぬ神に祟りなし教育委員会とか、
横一線友の会、将又、同調圧力翼賛会の代表か何か、なの？お前」
「相変わらず意味不明の単語ポンポン出てくるよねぇ。それ、一体何処からひっぱり出してくる訳？そんなパワー残ってるんなら何か他の事に使ったらどうなのよ？使い道、完璧ミスってるよなぁ」
「脳と下半身の使い方は俺が決める。その与奪の権だけは絶対に渡さん」
「初対面の人がオヤジと話すには「オヤジ会話読解辞典」とかいるんじゃないの？そんな風じゃ」

「そんなもの弊社出版部では扱かわん」
「あらららら、今度は突然ビジネス話」
「商売のネタはそこいら中に転がっている。「大才は袖擦り合うが縁をも活かす」と言うだろうが」
「あら、今度は自分が大才になっている」
「変幻自在にして千変万化と言え。同じものでも言い方次第。それ次第で相手の視野角がまるで変ってくる」
「これじゃ母さん逃げるわ。やっぱオヤジが退いたんじゃなくて母さんがズラかったんだ、真相は」
「又、蒸し返しか？この前の」
「蒸し返しじゃなくて再確認と再評価後の認識改め」
「だんだんお前も俺に似てくるな。してみるとやっぱ俺は傍から見るとかなり面どぃ人間の様だな」
「そう言う処は素直なんだけど、いざ実行面となるとその反省が全く反映されていないよね、毎回。
母さんじゃないけど、オヤジ、一体大学で何やってたの？
免許も取らず、単位も取れず、留年する事２回。そんなに時間あったのに一体、毎日何をやっていたのよ？」
「アルバイト。それとロマン追いかな？
そういえば稼いだ金は全部、旅行だったな。
朝ユースホステルでサイコロ振って「頭が西向きゃ、尾は東」で一日を決める「ら」抜き「出た目」生活」
「そういう生活送るとこうなっちゃうんだ」
「こうなっちゃうって、どうなっちゃうのよ」
「「年齢」による学習効果０の「ズレズレ」ガキンチョ爺さん、に」
「佳き「年輪」効果で「フレキシブル」な俺の事、言ぅとん？」
「Sure!!」
「What？」
秋の宵。
そぅ、こぅ談義の父子（おやこ）でした。

2022/9/17
再開後２作目の、父子（おやこ）会話シリーズ（？）です。

このシリーズはそれ以前の自分の作物に比べると、圧倒的に長い時間を費やして推敲をしております。
理由は、自分の中で二人の人間が居る事になるためで、相手の立場に立って推敲するのが相当に難しいからです。
何しろ実際には自分は今一人暮らしで、相手が横に居るわけではないからです。
しかも息子は二人居りますので、自然とその合成形となってしまい、実在する人間ではないので、しょっちゅう「この言い方って、リアリティあるんだっけ？」等と足止めを食らってばかりいる為です。
後、原稿用紙 3 枚以内の制約は、自分の様なお喋り人間には相当なる負荷になっております。かなりキツイです。
なので、推敲時間が圧倒的に長くなってしまっているようです。

自分は全くの素人で、趣味でこれを書いておりますので創作過程に於ける「秘密」なんて言うもののあろうはずもなく、誰に憚る必要も全く感じないので、毎回こうして創作過程の事実をご報告申し上げております。
本音が言えて、結構この部分の「書き」が一番楽しかったりもしております。

本編

2022/9/18

「それぞれの秘め言（ごと）」

「オヤジ、この辺をキョロキョロしながら歩くのや道端に落ちている物、拾うの、やめてくんない？
近所の人が「アンタとこの爺さん、スパイ仕立ての乞食なんじゃないの？」って言われたから。
直に面と向かってじゃなくて「目が、そう言っていたから」止めてよ」
「目は口ほどにものを言い、か」
「教養見せびらかしている場合じゃないでしょ」
「別に家の中の様子を覗っている訳じゃない。木の枝に止まって囀っている鳥の様子を見たり、草むらの中のバッタだとかカマキリ見つけて、その様子を見たり、しているだけだ。昨日は居たけど、今日もいるかな？とか」
「店やって行く上で、鳥も虫も関係ないっしょ」
「幾ら店が経営難だからって、別にその足しにしようと下向いて歩いていた訳ではない。事、物拾いの件は。
丸まった枯れ葉が雀が路上で藻掻いている様に見えたからだ。それで目を凝らして近づいて見たら、枯れ葉だった。最近目が悪くなって誤認しただけだ」
「どうしてそこで雀が転がっているっていう発想が出てくるの。

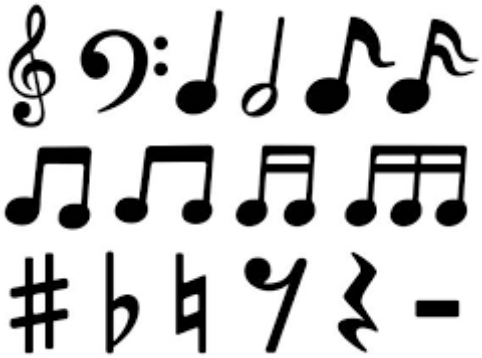
仮に枯れ葉じゃなくて本当に雀だったとしても、大方の人は気づかないし、気が付いたとしてもその大半がそのまま通り過ぎちゃうでしょ？
何で止まって腰をかがめるのよ？
何故そう極めて稀な生起確率の行動に出るのよ、オヤジは。
いい歳こいて学童に多い多動性なんチャラ症候群なんじゃないの？」
「興味を抱くのに年齢は関係なかろう。
大体今の人は周囲の出来事に関心が無さすぎんのよ。
脇で自転車が横転してようが前行く人がハンカチ落とそうが、全く見えてないでしょ？或いは見えても、知らぬ、存ぜぬ、我、関せず、でしょ？
是って触らぬ神に祟りなし教育仕込みで見て見ぬ振りを履行しているだけ、かどうかは知らん、が。
兎に角スマホで「忙しがって」見せるか、前方 50m 先に視点を定め、そこからテコでも目線を外さず脇見もしない。
この方が人間の行動科学から言ったら遥かに不自然じゃないの？」
「それが余計だっつぅの。
仮にその通りだとしても、それを言った処で相手が変わる訳でもないし、相手にしてみれば、それこそ自分より下に見ている「スパイ仕立ての物拾い爺如き」から、分を過ぎた差し出構しい忠告なんか受けたらプライドが許さんでしょ、に
どうせキョロつくならお姉ちゃんのお乳とかお尻でも見てキョロつく方が未だ相手も腑に落易いってもんでしょ」
「そういえば数年前、弟が「冷静になれば乳と尻のどこがいいのか？単なる肉の塊ではないかって気がしてきた、最近」と妙な事を宣ぅてた。
この歳になるとそう思わん事もないが、いざ目の前にブツが転がり出てくるともぅインラン・ドスケベビッチ・ゼツリンコフの復活よ。
だがスケベしなくして人類存続があり得ぬ事を思えばスケベが一概に悪いとも謂えまい」
Secret voice
マジかよ？親族の前で
基、
「じゃ兎に角その線で」
「Yes Sir 隊長、渋々ながら」
Secret voice
是は重宝「お墨付き」
なんちって。

2022/9/18
今回は、恥ずかしながら、これのみでございます。
深く反省、深陳謝。

本編

2022/9/19

「薄い中身も語呂次第」



「コロナ禍後の商売の傾向。
土日祭日、山はなし。盆暮れ正月平準化。
ついでに、正月は冥土の旅への一里塚。目出度くもあり、目出たくもなし、うぅむ」
「又、漢語学校 and 一人格言同好会やってんの？ほんとに、店、潰れちゃうよ。
それにしてもオヤジは、オヤジのオヤジから影響受けまくりだね。漢文好きだった爺ちゃんの。どうせ喋るんなら商売上覚えた英語にしなよ。その方が未だしもカッコイイでしょうに。
その手があるのに、漢語に格言じゃぁ、古色蒼然過ぎて誰も近寄ってこないわなぁ」
「別に人気取り基準で、言葉を選択している訳ではないから、関係なかろう。
何で漢語、格言が口をついて出てくるかと言えば、事は簡単、語呂がいいからだ。リズミカルで歯切れがいいから、口にしていて気持ちがいい。ただそれだけだ」
「英語、喋っていた方がステータスも上がるし、第一おなごが寄ってくる確率、爆上がりだよ」
「何を志の低い事を言ぅておる。愚か者が。
薄い中身も語呂次第。コミュ力よりもステータス。
是なんだか知ってるか？」
「何それ？又、例の創作、即興、新作格言？」
「今度は歴史だ。語呂とステータス、つまり口にし易さと自尊心くすぐり。これはかのヒト

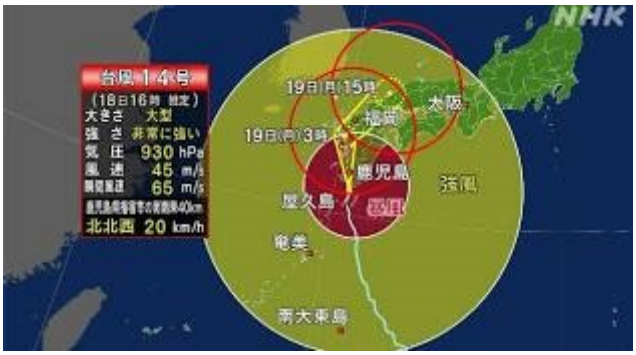
ラー君が用いた手法の要約だ。
人はそれが正しいかどうかよりも、覚え易いものに脳を支配される傾向がある。しかもそれが自尊心と結びついて繰り返し唱えられるといつの間にか脳の中核に鎮座ましましてしまうのだが、彼はそれを天才的な直感で感じ取り、上手く利用してあそこ迄成り上がって行ったと言う 歴史 and マーケティング、心理学上の話だ」
「オヤジも時々、俺に対して「ヒトラ（―）ってる」よね？自分で気づいている？」
「ハイ？
それじゃぁ聞こえがわるかろぅ。どうせ言うなら「論語る」とか「俳句る」と言った方が適切だろぅに」
「ハイ？はい？はぁあ?」
「何か変な事、言った？」
「わ、わ、分かった。学生時代 6 年間、何やってたか分。
旅行の他に古今東西の古典、岩波文庫、読みまくっていたでしょう？今は余り売れてないみたいだけど、岩波」
「読んでないよ、そんなインテリ文庫。読んだのは一般 people 向けの講談社かどっかの古典落語全集。是は何回も読み返した。自分で高座に上がったつもりになって、自己流の振り付けまでして。これは面白かった。病みつきになったなぁ」
「知らない人に見られなくてよかったね。見られてたらその後の社会生活、送れなかっただろうから」
「お前、育ての親に何か恨みでもあんの？男は産みの親にはなれんから」
「突っ込まれない様にいちいち過度の予防線、張るなよ。育ての親とか産みの親とか。誰もそんな処迄気にしてねぇよ。考えすぎの悪い癖だよ」
「過ぎたるは及ばざるが如し、か」
「その格言ショーも止めた方がいいよ。ウケないから」
「ウケ狙い。すべって気付く、時代ズレ」
「ダメだ、こりゃ。馬耳東風 itself だ」
うっ、me too だ。
感染（うつす）なってば。

2022/9/18
原稿用紙 3 枚以内掌編小説シリーズを始める前の書き方は、どちらかと言うと全体のストーリーが出来てから書き始めておりましたが、このシリーズになってからは、書き出しが思い浮かんだ段階で書き始め、書きながら自問自答しつつ書き進める方法に自然と切り替わってしまいました。
理由は分かりません。
只、この方が書いていて圧倒的に面白いです。
どうなるのか？どこに行きつくのか、書き終わるまで自分にも分かりません。
反面、刻一刻、その場その場で考えていかなくてはなりませんので、相当きついことも確かです。
只、怖いのは暴走です。
諌めて戴ける方が周りに誰もおりませんので、知らぬ間に明後日の方向にズレてしまっている危険性があります。
その場合は、皆様がたの方から忖度、遠慮、お気遣いなく率直にお諌め戴けますと大変ありがたいです。

本編

2022/9/19-3

「そろそろ気付いても…」



「しかしよく降るなぁ。毎週土日が是じゃぁ商売あがったりもいい処だ。
子供の頃は
♬雨あめ、ふれふれ、かぁさんがぁ、蛇の目でお迎え嬉しいなぁ。ピッチぴっちチャプちゃっぷ、らんらんらん♬
だったが、時を経る事幾星霜。60 年後の今は
♬あ～めが降ります、雨が降るぅ。遊びに行きたし傘はなし。紅緒のカッコも緒が切れた♬
状態になっとるなぁ」
「しっかしまぁ、よくそういう事考えつくよね？わが父ながら。理解に苦しむわ。一体、どういう頭の構造してんのよ？」
「俺が死んだら頭、腑分けしてもいいぞ」
「…（失語又は絶句）」
「もうそろそろ気が付いてもいい頃なんだよな。比べ物の無い程強いスーパー台風とか、異例の高温続きとか、スーパーでも異例でも何でもなくて、もう「常態」になっちゃっているって事に、さ。
という事は当店にしても売上あがったり状態がずっと続くって事を意味してるんだけど」
「ヤバいじゃないのよ」

「ヤバいけど、受け入れざるを得んやろぅ。いや、むしろ今の生活や価値観を改めざるを得んやろぅなぁ。成長の形とか、快適さの概念とかを「適者生存」チェックシートと照らし合わせて。
いずれにせよ今迄通りっていう訳にはもう行かんのよ。そろそろそれに気付いて、手遅れにならんうちに、一刻も早く地球様と仲直りせんといかん時期なんやと思うよ」
「ど、ど、どうしたの、突然。まともになっちゃって」
「俺の底流に流れているものはいつも「まとも」なのよ。それが水面近くに上がってくるにつれ水圧が緩む関係かどうかは知らんが変形して、水面に出た後は抑えるものがなくなって目が飛び出した深海魚みたいなヘンテコリンなものになっちゃってるだけなのよ。多分。元は同じで何も変わっていなくて、同じものが見る水深や位置によって変わって見えるだけなんだと思うけどね」
「何か今日、オヤジ変。長時間「まとも状態」を維持している。その方が、よっぽど変だ」
「変だからまともになれ。まともも変だから、又、「変」に戻れ、ったって、同一時間に二つの態度は取れないぞ。一体どうしろっつぅのよ？」
「「変」しか想定していなかったから、突然「まとも」に出てこられてちょっと面食らっただけよ。
ガキンチョがいきなり大人びた口利いたら驚くでしょ？
あれと一緒」
「子供の心に大人の財布。
是がおなごの良かにせどん定義らしいが、俺の場合は
子供の心に子供の小銭入れ
だからＮＧみたいよ。
一番目はお前の言を借りれば相当にガキンチョらしいから、それは確定したものとしてな。
二番目は売上から支払分を引かれるとATMに入れるお札がないのが最近だから、小銭入れ表現なのよね」
「変なオヤジが曲がりなりにも糸の切れた凧にならずに済んでいるのは商売やっているからかもしれないな。商売が錨になってフラ凧を繋ぎ留めているって感じ？」
「お前も少し、言葉の絵心がついてきたみたいだな。
凧と錨で未だ多少不整合感が残るが」

2022/9/18-2
本作物だけは、アップロードタイミング最優先で、誠に身勝手ではありますが、当欄を書く時間を省かさせて戴きます。

本編

2022/9/19-4

「明かすも何もフツーに真実」

「社会に出る迄、人と二人切りになるのがヤでしょうがなかったな。いや、怖かった。何、話していいんだか分らなかったし、いくら頭の中、探し回っても話すネタ見つからなかったし。たとえやっとこ見つけて話しても、ウケっこないって予測付いたし。多分自分に全く自信が持てなかったんだろうな」
「えぇ、そうだったの？信じられない。今と全然違うじゃないよ。今は口にガムテ貼り付けたくなる位ベラベラ喋りまくっているのに。ホントなの、それ？」
「あぁ、ほんと。少なくも大学出る迄はそうだった。それが社会に出て、増々どうしていいかわからなくなって、会社に行くと空気に触れている部分は何ともないのにワイシャツで隠れている部分だけパンパンに腫れ上がる症状が出てきたんだ。要するに出社拒否症よ。神経症だよ。脳の拒否反応を体が代弁したって訳」
「増々信じられん。今のオヤジから見るとまるで別人、違和感だらけ」
「処が或時、気づいたんだ。自分一人で居る時には頭の中で何人かの人間があれこれ話し合っているみたいで結構退屈しないし、孤独も感じていない事に、な。
処が一歩外に出ると突然話す中身が消えてしまっている。その差に気が付いたんだ。ん？どういう事？って」
「で、理由は何だったの？その差の？」
「要するに自分の頭の中の話を表に出す前に自重自粛しちゃってたんだ。無いんじゃなくて自分自ら外に出れない様押し返して(press down and push back)いる。それがストレスの

元になっているんじゃないか？そう思った。
それで、神経症になる位ならいっそダメ元。
自損覚悟で頭の中身そのまんま出した方が未だしもマシ、って頭を切り替えたのよ。
「窮鼠かえって猫を噛む」とか「窮すれば通ず」みたいな。
要は開き直って捨て身になっちゃった訳」
「確かにオヤジ、よく開き直るもんね、今でも。オヤジの得意技だよね、開き直り」
「お前は俺の正確な観察者なのか単なるイヤミ小僧なのかよく分からんが、結果その開き直りのお蔭で「身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ」効果が出てきた訳よ、その後。
すると意外なもんで、その頭の中のワイガヤ談義実況中継振りが「少し変だけど、なんかも白い」って、逆に。
なぁんだ、こんな事なら最初からそのまんま地を出してりゃよかった。変に忖度して言われもしないのに自重自粛なんてするんじゃなかった。
していなけりゃもっと楽しい学生生活を送れただろうに。勿体ないって思ったよ」
「今明かされる意外な真実。「波瀾万丈、人に歴史あり」っていう番組あったよね？昔」
「俺もテレビ小僧だったがお前も結構テレビ小僧だったのか。それこそ「今明かされる意外な真実」って感じだわ」
「おっ、元のペース回復(recover)。目出度し目出度し」
「人間には色んな面があるのよ。時にまともで時に変。それこそが「明かすも何もフツーに真実(でドラマ)」なのよ。常に同じ顔でなきゃ変、と思う方が逆に変なのよ。分る？Next runner 君達」

2022/9/19
以前にも申し上げましたが、このシリーズ、特に父子（おやこ）シリーズも完全なるフィクションで御座います。決して小説内の人物と書き手を混同されませぬように。
書き手はいたって平凡な爺さんです。この掌編小説と違って街ですれ違っても全く気付かれないでしょうし、印象にも残らないタイプの人間ですので、ご安心くださいませ。
噛みついたりもしなければ、決して突然裸踊りを始めたりも致しませんので。
賢明な読者の皆様方に於かれましては、蛇足とは存じますが、一応念のために。
書き手は、そういう事にだけは気を回す性分の人間ですので、悪しからず。

本編

2022/9/19-5

「木造大型客船「地球号」秘話」

「例えば今我々が住んでいるこの惑星を木造の大型客船「地球号」だと思ってみて。
木造と敢えて言っているのは地球がまさしく自然素材でできているからだ。
大型客船と言っているのはそれ迄全く見ず知らずの人たちが「偶々、隣り合わせている空間」と言う意味で、船だから航海に出た以上他に逃げ場がないとイメージしてみてよ」
「何、又？外が大雨でお客さん来なくて暇だから、その時間潰し？」
「切っ掛けは何でもいいから、まぁ、聴け」
「オヤジは明日店が休みだからいいけど、宮仕えの俺は仕事で、台風が来ても休めない。
手短にお願い、ね」
「従業員は休みだが俺は休みじゃない、が、それはそれとして。
例えば木造船の甲板で乗客が焚火したらどうなるか？ゴミが出たからと言って自分の客室を汚すのは嫌だ、それで自分ゴミをそこいら中に撒き散らしたらどうなるか？気に入らないからと船員や他の乗船客に向かって鉄砲を当り構わずブッ放したらどうなるか？
無論船員も乗客も「ヤバい」からと言って沖合遥か洋上を進む船から逃げ出す事はできない。
で、その結果、どうなるか？
直ぐにも想像がつくだろう？
だが、船側は船客の動揺を恐れて焚火の件もゴミの件も、鉄砲がぶっ放された件すら内緒にしたり、情報に手を加えダウンサイズして伝えたりする事に躍起になる。
が為に、お客さんは危険に晒されているにも拘らず案外呑気に毎日を過ごしている。
実は、是が今の地球の状態だ。かなり危うい。

一方この船上では、毎夜グランドホールでアトラクションやディナーパーティが開かれる。豪華な宴席でホールの周りには見栄えのいい観葉植物がおかれている。勿論それぞれのテーブルには花が飾られている。
乗船客は男も女もドレスアップしてホールに来る。来る前に自分のドレスアップ度が一番効果的なものかどうか、他の客室の様子をチェック（スパイ）する人も出てくる。他には客室やみんなが集まったホールの空調の効き具合どうのとか、出てきたステーキの焼き加減が今イチ自分のイメージしていたものと違うのとか、みんなそれぞれ勝手な事を言っていたりする。
要するに乗客の頭の中はそんな状態だ。
処が或日、焚き過ぎで温度が想定以上に上がったボイラーの熱が知らぬ間に船底にオゾンホールの如き穴をあけ、そこから浸水し始めた。
この船は可成り旧式で空調パワーを何とこのボイラーからとってたんだ。温度が上がった原因の一つに多くの乗客が「空調の効きが悪い」と同時にクレームを唱えた事も一因だった。
さてこの船の運命や、如何に？果たして無事寄港出来るのか？」
「無理だね。原因は違うけどタイタニックの二の舞だ」
「そう。タラレバの話になるが乗客が空調の効きに対する文句を今少しトーンダウンしてタラ、或いは船側が事実実情実態を包み隠さずちゃんと伝えてレバそうはならなかったかも知れん」
「が、そうじゃなかった」
「それではマズかろぅ？」

2022/9/19-5
本書でAmazon kindle本、１００冊目となります。各号を統合したり、納得できなくなったものを廃版にしたり致しましたので、現在 kindle コーナーに上梓されているのは半分ほどとなっております。
１００冊目と言うと皆様方は自分の「ドヤ顔」を想像されるかもしれませんが、これにはちゃんと種明かしがございます。
それは、原稿用紙３枚以内掌編小説を始めたことによって、突如37冊が一挙追加となり冊数稼ぎとなってしまったからです。
なので、アンマリ「ドヤ顔」にはなっておりません（実は、少しなっています… 恥）
ただ、自分の中では一つの区切りを付けたかったものですから、100冊目のテーマは日頃から気になって仕方がないものを選びました。

本編

2022/9/20-2-2

「おやちち」

「分った。そういう意味かぁ」
「何が分かったの？何一人で喜んでんの？」
「いや、何でオヤジっていうのかなぁって前から疑問に思っていたけど、それが今分ったのよ」
「相変わらずどうでもいい事に時間費やしてるよね、オヤジ」
「気になるとどうしても頭から離れなくなるのよ。処で、何で父親の事、オヤジって呼ぶか、知りたくない？」
「別に。でもそういうと直ぐ拗ねるから一応耳だけは貸すよ」
「オヤジって漢字で書くと親父だろ」
「ハイ」
「是って父親の前後反対書きだろ。よくおんなを「なおん」ていったり旨い（うまい）を「まいぅ〜」って言ったりするだろ。その伝で父親を入れ替えた親父は「おやちち」になる訳よ。でも「おやちち」だと迫力ないし「親乳」とも間違えるから「ち」の二つ重ねを濁らせて「おやちち」を「おやぢ」にし、次は「ぢ」だと「イボ痔」なんかの「痔（ぢ)」と間違えるといけないから「おやちち」「おやぢ」が「オヤジ」になったんじゃないかなぁって」
「一応もっともらしく聞こえる」
「だろ」

「だろ、もいいけど、で、だから何？って、言われたら、何なんだろぅ、それって」
「何なんだろう、それ？じゃなくて、疑問が一つ解けてすっきりしたって事よ。それで十分。世界情勢には全く影響ないけど、自分の精神衛生上は極めて有意な影響を齎したっていう「超個人的且つ自己満足的」な話だけど」
「オヤジはどうもそれが多過るのよ。一人で喜んでる事が」
「お金かけずに楽しめて、いいんじゃないの？」
「それだと社会や家族貢献度ゼロでしょうに」
「あながち、そうでもないかもよ。楽しみを得るのにお金使わんから、稼ぎ増やす為に人を押しのけたりせんで済むし、道具使わないから CO 2 排出ゼロ。その反面、人各々の持ち味を活かした自由連想法で個性と脳の活性化にも繋がる。どう？こういう貢献」
「屁理屈とこじつけ言わせるとほんと、天才的だよね。だからかえって腹、立っちゃうんだけど」
「めんご、ちょっと引っ掛けが過ぎた。でも、
本当に言いたかったのは、何も改革、改善、進歩、進化は「新たに何かを立上げる事」ばかりじゃないよ、って言いたかったんだ。
そこにもっていく為のイントロだったのよ。長過ぎちゃったみたいだけど」
「何処までが引っ掛けで何処からがマジなのかよく分かんなくなってきた。で、要は
何？」
「要するに経済成長が絡むから改革、改善、進歩、進化と言うと、深く考えもせず反射的に積み増し方向の「新規立上げ」に猪突猛進してきた訳で、地球資源が限られている事が日々実感され、それにポイントを移さないと存続すら危うくなっている今は、新たな積み増しをしないで今あるものを上手く活かす方向に変えないといかんと思うのよ。「楽しみ」や「面白い」「快」や「快適」の得方なんかも根元から。
その一例に「オヤジ」の話をした訳」
「一理あるけど、何故か素直に聴けない。言い手がオヤジだと思うと、反射的に」

2022/9/20-2
書くのに時間がやたら掛かるのは、どうもダメなようです。
是を書く前に本日朝から別なものを書いておりましたが、止めました。
理由はつじつま合わせと論理的矛盾の解消にばかり目が向いてしまっていたからです。
こういうのはいけません。書く方がつまらないという事は、まず十中八九読む方もつまらなく感じるでしょうから。
なので、あっさりポイしてしまいました。
替わってこれは、出来がいいとは決して思いませんが、書いていて楽しく時間も余りかかりませんでした。
是は自分だけかもしれませんが、長時間かかって書いたものは先ずダメです。」
「推敲に推敲を重ねて」なんて言うのは、聞こえはいいですが、自分の場合に限っては先にも申し上げましたように、つじつま合わせと矛盾消込作業でしかありません。
こんなことを書くとプロの方や編集者の方から顰蹙を買うかもしれませんが、自分はド素人の強みを生かして「思ったことをそのまま」書く事にしています。
それが他の方の役に立つかどうかは分かりませんが、自分の置き土産です。
目を通した後、いらなければそれこそ「ポイ捨て」してくださっても一向に構いませんので。

本編

2022/9/21

「どぅせやるなら畑違い」

「ところでオヤジ、何で又カレー屋なんか始めたの？しかも外国人と。カレーにしても外国人にしても畑違いもいい処じゃない」
「始めるなら全く畑違いの 0 からだって思っていたのよ。外国人の件はその途中の副産物だったけど。いや、本丸よりもっといい産物になった」
「フツーそれ迄の仕事の延長線とか、人脈のある所とか、学生時代の専門畑とかじゃないの？」
「其れって失敗の元みたいなものよ」
「成功の元じゃなくて？」
「今まで俺が見てきたのは、例えば起業する前にいた会社の元部下や元の仕入先幹部が「今まで同様、使える」と思って始めるのが大抵だったが、肝心な事を忘れていんのよね、その人達」
「肝心な事って？」
「皆「元」って事。「現」じゃないのよ。つまり「当時は」上長「当時は」お得意様だったけど、今は、長も様もつかない単なる部外者なのよ。そんな人の話、誰が聴く？そんな奴に偉ソな顔されたらどんな気、する？」
「なぁる」
「それに気付かないから失敗するのよ。先を急ぐ余り既にされている reset に気付かず reset 前の無効な short cut 使うから失敗するのよ。本人には「効率的」にみえてるんだろうが、実は非効率で効果なし。

イヤむしろ逆効果。
だから「どぅせ始めるなら違う畑」で「0から」って。その方がスリリングで面白そうでもあったし」
「ほんと「面白い」に拘るよね、オヤジは。
俺には盲、蛇に何とか、にしか見えんけど。よくそれで今迄生きてこれたね」
「成功可能確率1％でも、成功するか否かの丁半確率で言えば半々の 50。物は考えよう。確率、結構高く見えない？」
「すげぇ荒ら技。
まぁ、いいわ。ところで、外国人の方の切掛けは、何？是こそ想像がつかないよ。完璧に」
「そんな事ないでしょ。カレー屋始めたのだから、カレー文化圏の外国人だろぅくらい直ぐ、思いつかない？」
「そういえばそうだけど。じゃ何でカレー屋だったの？始めたのが」
「お客さんだったの。俺。たまたま昼飯に入って店の亭主が外国人だったの」
「昼飯にカレー食べに入るとカレー屋始めるの？ラーメン食べに入ったらラーメン屋？」
「ぅな訳ないだろう、幾ら行き当たりバッタで出たとこしょうぶ湯の俺でも」
「じゃ、何で？」
「言葉は通じなかったけど気が合ったのよ。それでお互いジェスチャと片言の日英語で話し始めて。お前には知らせなんだが、変な奴らに家乗っ取られての浮草生活で命も危うかった一人の時に「店のモップで一緒に戦いまショ」って言ってくれたんだ。警察も近所も逃げ腰の中で、そいつだけが逃げずに残って」
「いない間にそんな事、あったんだ」
「老若男女、貧富、国籍なんて関係ない。あるのはただ、
常に毎回一人一人、眼の前の人間に「まこと」があるか、ないか、だけだ。
面倒だが毎回それを見る。
カレー屋も外国人も全くの畑違いだったが、
ヤッパ畑変えてよかった。
「どぅせやるなら畑違い」
大変だけど、
楽しいし、面白いから」
「はい」

2022/9/21
今迄は、何本か記事が溜まると一冊にまとめて合本版を出しておりました。
しかし今回の「原稿用紙３枚以内掌編小説シリーズ」の記事に限って、合本版は考えておりません。
理由は「自分が読者だったら？」の立場に立ち「買う前、読む前」の読者心理を想像してみた上での結論に従ったからで御座います（有料の場合です）
その想定致しました心理とは、
一、前提として読者は忙しい。なので、ボリュームは原稿用紙３枚が上限。
一、読み残しはもったいない。
一、勿体ないから全部読まなくちゃ、は心の重荷。
一、合本、〇〇集だと個々の作品に当たり外れがあるので、読み飛ばしたものが多いと一篇あたりの単価が上がって、結果割高。
一、割高と言えば、実績のある素人さんや名の知れた作家さんの作品なら未だしも、どこの馬の骨とも分らない評価未知数の「素人物書き」に大枚はたくつもりはさらさら無い。
● 結果、「忙しい」中で「長い」「割高」「未知数」なものには恐らく「重荷感」を抱くであろう様な気が致しましたので、
●一篇、原稿用紙３枚以内の、価格９９円、単品の儘、にしておく事に致した次第で御座います。
そういえば今回は３９巻。サンキュウ、皆さま、でございます。

本編

2022/9/23

「走りながらのギアチェン」

「オヤジはお金持ちになりたくないの？有名とかにもなりたくないの？」
「毎日少し酒飲のめてフツーに飯さえ食えればそれで御の字や。今でん後ろ指ぃ刺されてしんどい思いしとぅに、有名なんぞになってもぅたら表、歩けひぃんやんけ。一挙手一投足、注意払ぅて神経使わにゃあかん。
そんなぁ、かなわん、ヤダ。
フツーに街歩き出来る方が、上や。
有名税なんぞ払いたない」
「論語ぉ。
処で今日はなんで関西弁なの？何か企んでる？東京生まれの孔子様」
「何ソレ？Nothing anymore や。TPO 重視＆表現の自由からや。何も東京生れやからいぅて関東弁喋らなあかんいぅ決まりはなかろぅ」
「それはそうだけど、突然関西弁喋られたら何か怪しいと思うわ、フツー」
「カナダじゃ英語の後に突然フランス語、ありやろ。スイスじゃ英語の後にロマンシュ語もありやろぉうが。それに比べたら屁みたいな落差や」
「出ました、五輪三段跳び級、驚異の飛躍的論法」
「じゃぁ、少し控えて広東語と北京語の差ぁ位に変える、か？」
「オヤジってそれなりに教養あるのに、なぁんか使い方、間違えてんのよねぇ。普段黙ってて、外国語の処だけ喋ったら、結構インテリに思われるんじゃないの？世間様から」

「いいの、語学なんぞ、どうせコミュニケーションの一道具に過ぎなぃんやから。この程度の使ぁ方が妥当や。なまじぃインテリに思われよぅ、の道具になんぞ使ぅから、話、ややこしぃなんねぇや。目的、ちゃうねん。コミュ目的なんか、自分に箔をつけて見せよういぅんが目的なんかで、完璧、ちゃうやんけ。我が国の語学教育の根本的間違いは、語学学習の目的が何なのかぁを問わずに、直ぐに高得点獲得競争とその必勝テクに走る処にあんねぇや」
「オヤジ、そういう話、ＳＮＳで講義動画投稿したら結構若い奴に人気出て儲かるかもよ」
「だからヤ、言ぅてるっしょに。有名になるぅん、わ」
「うっ、今度は北海道弁混じりになった」
「お前結構、方言知識あるぅんね」
「知識って程じゃ。昔、テレビの「北の国から」で田中邦衛が喋ってたから」
「おっ、テレビっ子のとこだけ正統派遺伝。
基。
それはそれとしてぇ、や。第一わしの顔、公共の通信インフラに載せるよな、代物、ちゃう、やんけ」
「最近、不細工な方がウケいいみたいよ。変に男前なんかより。味、ありそうに見えるし、「自分の方がまだまし」感、持てるからって」
「お前、慰めとん？それとも傷口に塩、擦り込んどぉ？which?」
「さっきの謙虚さ、口だけだな」
「過ぎたるはなんチャラや、何でん。
金もそれなり、人気も程々。
今の貧乏からフツー級に rank up＆フツー歩き出来るだけで十分。何で皆それ以上求める？
世界一の金持、人気 No1。疲れるだけや。
休日を、返上して迄、コケ（虚仮）探し
時、金、心身、出資大損、元取れず
結果は常に、死屍累々」
「…」
「先ずそのロスからチェックしてみん。
走りながらギアチェンジしてみん？
キモかろうが、一緒に」

（注）
決して、何か特定の団体組織に誘うものではございませんせんので、ご安心くださいませ。
読み物としてのみ、お楽しみくださいませ。

2022/9/23
自分の書き物の事を
「あの絵本みたいなの」
とある人から言われました。
殆どの書き物が写真や絵、図表やイラスト（以下「写真」とだけ記す）付きだからです。
そうなっているのは以前からのクセだからです。
只、今思い返してみると
一、文章の補完ではなかった。写真がなくても成り立つように書いていた。
一、書き出す時に写真は未だなく、途中から入れていた。
一、入れると、そこから外部刺激があって、新たな連想が広がった。
一、結果、予期せぬ書直しや、場合によっては結末、タイトル（主題）すら変わる事もしばしばあった。
一、その効果を譬えて言うと頭の中での会話参加人数が増えたような、いなかった編集者が新規で就いたようなものでもあった。
一、その効果が主なら写真は、書き上げ後に消してもいい筈だが、残したのは備忘録的感覚からだった。
●まとめると、書き物の中の写真は、全く書き手の都合によるもので、結果写真は、書いた後の残骸の如きものであった。
●なので、読む方に対しては誠に失礼極まりないものであった。
「あった」申しましたのは、今は、むしろこの形を活用してもっと伝わり易く読み易いものが出来ないだろうかと思い始めたからです。
●但し、ある時間が経ってもできなければ、皆さまに対しては、大変失礼極まりないものなので、出来ないと判断した時点でこの方法はやめるつもりでおります。

本編

2022/9/24

「本日、おやこ逆転の日」

「だから嫌いだって何度も言ってるでしょ、って言ってんのに」
「今度は、何？なに又ザワついてんの？オヤジ」
「何で俺がスマホとパソコン大好きってなるんだ、エッ？」
「エッて、いつもピコパコしてんのを目にするからじゃないの」
「仕事上やむを得ず、だ。じゃなきゃ、んなもん、見たくもない。
目に悪いし、鬱陶しい。
第一周りの観察が出来なくなる」
「観察って？」
「俺が若い頃、車の免許取らなんだのは観察出来なくなるのがヤだったからだ。車じゃスーッと通りすぎて気付かない事も歩いていると色んな事に気付く。少なくもそのチャンスが増える。そのチャンスを見逃したり取り零したりするのがスゴク勿体ない気がして、敢えて車の免許取らなんだ」
「うつ病で教習所の適正、刎ねられたんじゃなかった？確か」
「あれは結婚後。是は留年して大学６年、超暇人してた頃の話だ」
「じゃあ、何でそう迄して観察に拘ったの」
「一つには、子供の頃から物書きになりたかったのと、今一つは何をするにも全ては「観察からスタート」って思ったからだ。今でも、だが」
「物書きになるっていう動機なら何となく分かる様な気もするけど、その「何をするにも」って何の事？解らん」
「例えば事業を始めるのでも、相手を選ぶのでも、もっと身近な処で言えば、それこそ毎日みんなが見ているスマホやパソコンにディスプレーされるネットの記事でも、

「是って、本当？」というフィルターを持っていなかったら、
言われたまんま、促されたまんま、見せられたまんま、そのままを no check で鵜呑みにする事になっちゃうだろ？
それがヤだったから、そうならんで済む何かが是非とも必要だと思ったからだ。
その何かが「観察」だ。
何の事かっていえば、例えばネット。
是って既に「相手の思惑が入り込んだ加工後２次情報」でしょ。それに対して「自分の目で観察して得たの」は１次情報」
この後者で前者をチェックする。つまり後者が前者の見張り役になる。そのフィルター効果をもたらすのが「観察」と言う訳」
「オヤジ、そういう話、人がもっと簡単に分る様にした方がいいと思うよ。よく聞けば言っていること自体、そんなに間違ってない気もするけど、そう思う迄の説明長すぎ、１次情報とか２次情報とかもムズすぎ。是じゃぁ中身まともでも話、途中から誰も聴いてないよ。「芭蕉が我が師」って言ってる割には」
「分ってんの、すっごく。でも未だそこ迄行ってないの。自分でもイライラしちゃうけど still not reach yet の on the way なの、未だ」
「いいんじゃない、やる事増えて」
「他にもやる事、沢山あってこればかりって訳には」
「忙しい内が華、よ」
「ハイ？」
「この世に居る間はせいぜい働いて、ゆっくり休むのはあの世に行ってからで十分。
あの世に行ったら「毎日が永遠に日曜」
うつ病で社内失業して以来
「暇が何より怖い」って
自分で言ぅてたっしょ、に」
「ハイ、父上。今日は完璧、お前の方が親だな」

2022/9/24
「あんた、近頃元気じゃない」
「はい、だいぶん涼しくなったんで。夏はエアコンなくて殆ど死んでましたから」
「えっ、あれって、悲惨さアピールの同情押し付け販売で、売上の足しにしようっていうお芝居じゃなかったの？」
「ハイ？」

自分の人相と日頃の行いが悪いのか？
それとも「入れ代わり立ち代わり日替わり定食で現れる困難」続きの世情のせいで、人心が病んでいるのか？
いずれにせよ、そんな毎日のストレス解消に飽きもせず連続で、このシリーズを書いております。
読んでおられる皆様がたの方は、いかがお過ごしで御座いましょうか？

本編

2022/9/24-2-2

「借り猫、じゃらし」

「しっかしまぁ、よく続くよね、ご難が。ちょっとそこ迄続くと、どぅなのかなぁって」
「どぅなのかなって、何が？」
「その血、受け継いでいるとすると俺もヤバいかなぁって。早々に戸籍外しておいた方が、いいかもなぁって」
「お前なぁ、俺も俺のオヤジに相当立てついて可成りな事言ったが、流石にそこ迄はいわなかったぞ。お前の世代ってそこ迄えげつない言い方平気でする世代なんか？」
「反対よ。俺の世代は至って大人しくて何も言わないよ。何も言わずにスルーするだけ。一種借りてきた猫、じゃなくて借りてきた猫マスクを被っている。マスク、その心は中身は猫じゃないっていう事。本当は結構獰猛なのよ。中が獰猛なのに表向き借り猫、演じている訳だから、それなりにストレス溜まってんのよ」
「それでか、メディアにデカデカと出る様な大事件起こした奴、ひっ捕まえてみると「日頃はとても音無しい目立たない人だった」っていう周囲のコメントが多いのは」
「そうね。事の直前まで借り猫マスク被っていてこまめなガス抜き殆どしてないから一気に爆発しちゃうんだろうね。俺なんかそれからするとオヤジ相手に結構ガス抜き出来てるからその心配ないけど、逆に同世代からはオヤジ・ライクに「ちょっと KY」って言われて、距離置かれてるよ」
「えぇっ、普段のお前レベルでもう、ちょっとした異端領域扱いなの？」
「そうなってるみたい」

「あっ、今日のお前レベルなら分かるけど」
「でも、中身は今日の俺レベルだと思うよ。殆どの奴が」
「かなり鬱屈してんなぁ。俺はうつ病まで行ったが、そんなんじゃ、皆うつ病一歩手前の「抑うつ状態」言い換えれば「うつ病予備軍」みたいなもんじゃない」
「最近ニュースになってるどっかの国の話じゃないけど「うつ病「予備役」部分招集」なんていったら集まるの、30万人どころの話じゃないよ。多分我が国の半分、6000万人位優に集まると思うよ」
「それ位あるとその鬱々パワーって核兵器級の破壊力だよな」
「6000万てぇ事はそれ、俺達の世代だけじゃないって事だよ。俺より若い世代は勿論、オヤジやオヤジのちょっと前の世代も殆ど全部猫っ被りマスクの下で鬱々パワーのやり場に困って日々暮らしてる、って事だよ。オヤジは天然でそんな風だから分んないだろうけど」
「それでか、俺が矢鱈意地悪されるの。アンマリ鬱々してないから。元うつ病のくせして今では自分達差し置いて鬱々してないのが癪に触ってんのかな？
俺にだけじゃなくお互い同士意地悪し合ってんのもその鬱々が原因なのかな」
「学校や社内いじめが社会問題になって、其れだと罰せられるから、罰せられない意地悪が横行してるんじゃない？知らん顔してせっせと。
意地悪っていじめの変形で、更に巧妙で、対象が不特定多数だから数も圧倒的に多い。もう国民病だよ。借り猫マスク同士お互い「隠れ足引っかけ」し合う良くないガス抜き法だよ」
「質悪る、隠れ分」

2022/9/24-2
いい歳こいて、次から次へとよくもまぁ書くネタがあるもんだとお思いかもしれませんが、裏を返せば、それだけ今迄、溜まっていたという事で御座います。
いい加減ガス抜きしないと、爆発しちゃうよ、という今回の主題の一部と重なる状況で御座います。今の自分は。
本編は完全なる自分のガス抜きでございます。
毎回の身勝手、恐縮しつつも、止められない昨今で御座います。れば。

（著者プロフィール）
うときゅう いっき
本名 宇都宮一貴（うつのみや かずたか）
一九五三年東京生まれ。
早稲田大学第一文学部露文学科を二回留年の後、卒業。
国内電機メーカー家電製品商品企画部に二十年間勤務。同子会社経理部等に十六年間勤務。
四十歳から五十二歳まで十二年間うつ病を罹患。
左遷、リストラ、降格、離婚、家族崩壊等を経験。
定年後、株式会社うとQを設立。
現在主業はネパールカリー屋。
趣味は観察すること、考えること、書くこと、盗撮はしないスマホ・カメラの四つのｋ。
著者名は苗字、宇都宮一貴の音読みで、中学校時代の仇名。
宇宙の「う」
東京都の「と」
宮殿の「きゅう」
数字の「いち」を詰まり音便で「いっ」
貴族の「き」
で、うときゅういっき　となります。
漢字表記にしますと、かなり御大層な人物に見え、実態に全くそぐっておりませんので、誤解を招かぬよう音読みひらがなで表記しております。
ホームページ：http://utokyu.co.jp

（出版情報）
著　者 うときゅういっき
発行人 宇都宮一貴
発行所：株式会社うとQナマステ別館堂出版部
〒二一五‐〇〇一八
神奈川県川崎市麻生区王禅寺東５丁目３４番７号
電話：〇四四‐九八九‐一六九八
発　売 株式会社 うとQナマステ別館堂出版部
編　輯 しばらくの期間「ナマステ別館堂出版部」
カバーデザイン＆DTP 製作 当面の間「ナマステ別館堂出版部」及び「ナレッジフォレスト 大竹鉄哉」
©Kazutaka Utsunomiya uploaded in japan 2020
発行日：二〇二三年五月二十四日 初版発行
本書の一部または全部について、著作権上、著作権者の承認を得ずに、無断で複写、

複製することは禁じられています。

（その他著書）
●多数
●尚、掲載写真は全て google 画像サイトの著作権フリーのものをダウンロードして使用しております。当社には著作権、版権は全くない事を明記させて戴きます。